ＨＰ ＤＩＯ目次に戻る ＤＩＯバックナンバー

視点

中国の反日デモに思う

No196 2005年6月

四月上旬から中旬にかけて、中国各地で反日デモが起きた。新中国発足以来の大規模な反日運動であるといわれる。近代化が最も進んでいる深が引き金の一つになり、市長が万全の体制をひいた上海でも日本総領事館が襲われた。お隣の韓国における反日運動も相当な高まりを見せているが、ここでは中国の反日について考えてみたい。

中国における大使館襲撃デモというと、99年のNATO米軍機によるベオグラードの中国大使館誤爆事件を思い出す。かなりの死傷者が出て、夕刻には北京の大使館街は学生を中心とするデモ隊で埋まり、投石や破壊がはじまった。学生の行動の背後には、共産党の指示があったと伝えられている。江沢民国家主席の下で、全国的にひろがるデモを抑圧したのが、胡錦濤現国家主席だ。今回の反日デモは、インターネットという媒介があるが、どこか類似したパターンがある。

日中関係は、その時代時代の中国首脳の思想に動かされてきた。少し長くなるが、振り返ってみよう。毛沢東は、「中日戦争は日本の一部の軍国主義者が起こしたもので、一般の国民には責任がない」とし、日中の友好促進を基本とした。温和で懐の深い大人であった周恩来首相がこれを支え、頻繁に日中交流をはかった。72年の日中国交正常化は、その流れの中で実現した。日本との友好関係をさらにすすめたのは胡耀邦総書記で

あった。80年代初期には日中の蜜口時代を迎えた。しかし、やがて軍部を中心とする保守派の反撃が強まり、抗日戦争勝利40周年の85年には、さまざまな反日イベントが催された。同年春の中曽根首相の靖国神社参拝が火に油を注いだともいえる。中曽根首相は翌年から靖国参拝を避け、以後歴代首相もこれを踏襲することになる。だが胡耀邦総書記は失意のうちに政権を去った。

こうして89年の天安門事件をむかえる。ソ連のペレストロイカに刺激され、自由化を求め連日天安門広場に集まっていたデモ隊が、戦車まで出動させた軍により武力鎮圧を受けた。数百人にのぼる死者が出、その後中国は欧米から長きにわたり、自由と民主主義を弾圧する独裁国家として位置付けられた。中国は国際的に孤立化し、欧米の首脳は勿論、閣僚級の訪中も絶えた。そのとき「中国を孤立化させてはならない」と手を差し伸べたのは日本であった。これは労働組合の世界でも同じであり、連合は国際会議のあらゆる機会を通じて「総工会」の認知と、孤立化の危険を訴えてきた。

しかし、天安門事件をかえりみて「最大の失敗は青年、学生の教育の不足」と認識した鄧小平は、近代における外国侵略の歴史学習を通じて、愛国主義の醸成に力を注ぐことになる。内政失敗の批判を、海外非難に転ずるのは政治の常道である。小平から後継者とされた江沢民総書記は、その路線を忠実に走った。95年の抗日戦争勝利50周年記念大会で演説に立った江沢民は、「日本侵略軍によって中国人3，500万人が死傷し、南京大虐殺だけで30万人以上が死んだ」と述べ、日本国内における侵略を美化する動きを非難した。98年、中国元首としてはじめて来日した江沢民は、日本各地で歴史問題を強調し、国民のひんしゅくを買った。このときから日本国民の対中感情は急速に冷えていった。

03年に国家主席に着任した胡錦濤総書記は、その資質を見出した胡耀邦の路線を継ぐものと期待されていた。胡錦濤は、抗日戦争を体験していないはじめての元首でもある。しかしその期待はあえなくついえ去った。今年はやはり、抗日戦争勝利60周年の年であった。「なぜいま反日デモか」さまざまな推測が飛びかわっている。国内の貧富の格差拡大と失業、尖閣列島、台湾、度重なる靖国参拝と問題にことかかないが、この

度は「日本の国連安保理常任理事国入り反対」が最大の焦点であると見られている。「日本の政治大国化をなんとか阻止したい」、その背後にはアメリカとならぶ覇権をめざす大きな勢力があるようにみえる。

中国の反日デモが、愛国反日教育を下敷きとしていることは言をまたない。中国の中学校の歴史教科書は、三分の一が抗日戦争で占められているという。中国五千年の歴史の中で、わずか15年にである。残念なことであるが「抗日は中国のアイデンティティの一つ」であることを、日本人は認識しなければならない。このことは韓国にもあてはまる。手許にある韓国の高校の国定歴史教科書をみると、約500ページのうち180ページが近代史にさかれ、その多くが日本の植民地時代の圧制と抗日運動の記述である。好日的といわれるシンガポールの教科書も例外ではない。マレー半島上陸に始まった侵攻から独立まで、なにがあったかを逐一臨場感をもって描き出している。この国でもしばらく滞在すれば、戦場下の、占領下の体験が、今も記憶として引き継がれていることを知らされる。

ひるがえってわが国の歴史教科書は、わが国の行った侵略行為についてどれほどのことを書いているであろうか。そこに彼らが求めている歴史認識を共有できる記述があるのだろうか。大体私の受けた歴史教育は、日露戦争くらいでいつも終わってしまった。このことは今でも同じかもしれない。職場の二十台の女性も、「受験テストにはでない」と教師は侵略の歴史を教えなかったという。原子爆弾の脅威を教え、平和の尊さを実感させることは重要である。しかし、グローバル化のなかでアジアの人々と共生するには、もっと大事なことがあるのではないか。ちなみに連合総研のある九段下には、戦後50年を記念した七階建ての「昭和館」がそびえている。しかし、その展示場には、被災の資料はあるが侵攻の資料はなにもない。

筆者はかって韓国労組との交流で、求められて慰安婦問題について二度にわたり長時間ディスカッションした経験をもつ。いずれもはじめは射るような視線の中で極めて緊張した時間をもったが、最後は「おたがいに今日の交流を大事にし、明日の友好をひろげよう」と声高らかに乾杯しあった。彼我の教育は上述のように大きく異なるうえ、時の

政治リーダーとマスコミに国民は躍らされる。労組の国際交流は頻繁に行われているが、このような時こそ正面からニュースをとりあげ、意見を交換する場をもってほしい。そのために日頃から幅広く知識を求め、自分なりの視座をもつことが欠かせない。（有情無情）

＊参考資料 清水美和著『中国はなぜ「反日」になったか』文春新書

ＨＰ ＤＩＯ目次に戻る ＤＩＯバックナンバー